

プライバシー保護のための、“情報”の概念への挑戦

詳細説明

アイデアよりも先にある思想

あるサービス機関がICTを利用して、サービス会員の個人情報から、プライバシーの侵害が起きてしまう、というようなことを少し調べた結果、また、大きく抽象的に考えた結果、個人“情報”を保存するからよくないのではないか、この“情報”について少し考えてみようとなった。k-匿名性とか、モザイク効果問題とか、専門的なことは知らないが、専門家はとにかくデータベースのレコードという非情に単純化された“情報”を対象にしている。ネットに写真や動画がアップされる時代である。データベースの文字列のレコードだけでは対策が追いついていない。これは批判である。私はづかづか進む。想像で突き止めたのは、例えば、1つには“語り口”が考えるきっかけになることである。「あのひとは頑固だねー。1度おこり出したら止まらないよー。」この通り文字列になる。

音声ファイルになる。動画になる。それは分かる。

では、声の調子とか、話し手の表情の変化とか、はたまた、間(ま)はどうか、人間は感じとるが、はつきりと“情報”にはなっていない。

定義して数値にすることはできる。可能なだけのことである。それが真実を表現しているかは別である。

現在のICTのデータ化では欠落してしまうもの、そこに人間同士のコミュニケーションの“忘れ物”があると思う。“それ”を使用しながらのプライバシーを語るものは、どうやっても、現在のICTでは盗れない。

例えば次の表現である。「私の趣味は、野球のキャッチボールのシュート、シュート、シュートです。」

詩の解説のようになるが、パシッと取る。キャッチする。ボールを落とさない。

往復が続く。続くことがいいのかもしれない。

あるいは、シュートパシッとキャッチボールの音だけが響く。2人の会話は無い。静寂である。

でも集中できる。集中がいいのかもしれない。

つまり言い切ってはいい。しかし分かるものは分かる。

語っていない、語り得ない可能性もあるが、伝わる。

みんなこういう表現を磨けばいいのである。

これは“情報”があると言えるのか?欠落していると言うのか?データフォーマットをつくれればいいだけの話か?

議論を待つ必要はない。応用する。

必然的に、時間が長くなる。文字列が増える。短いほうが、少ないほうが、格好いいが難しくなる。

アイデア

以上をふまえて、本の貸し出し履歴のデータの取り方と、図書館利用の実態調査の方針を提案する。

貸し出し履歴は、誰かが(誰かは隠す)ある本によって(どの本かは隠す)どうなったかである。

誰がどの本を借りたかではない。

例えば、「彼はその本によって自身の無知を知った。そして、探求の旅が始まった。」

答えは「哲学のとおる本」である。誰かは最後まで明かさない。こういう具合である。

いたずらに詩的にすればいいというものではない。それこそプライバシーを詳細にまでばらしてしまう。

図書館利用の実態調査としては、「ある本によって1人を学究に目覚めさせた。」こういう間接的な感覚である。

本が貸し出され読まれることは終着点ではない。

本への感想、人生のターニングポイント、社会的な成果など、

事が大きくなれば、個人のプライバシーは隠されると考えるかどうか。

どうすれば“忘れ物”を大切にしたいか?コミュニケーションが取れるのか?反対の方向から考えを進める。

ICTで“情報”にならないもの、すなわち、言葉でないもの、数値でないもの、データにならないもの、

に注目すればいいのではないか。ICTが確立した技術であるがゆえ、それに捕捉されないものを狙う。

例えば、質問をしたら、返答に困った、とか、まだ考えがまとまってないのに、一生懸命、言葉にしようとしている、

とか、勉強・研究のために、あと何冊読めばいいかも分からないと分かっている、とかである。

また、“ない”もの、存在しないもの、否定であるもの、否定的であるもの、に注目するという手もある。

分からないを分かるということである。日本的な感覚かもしれない。

行間を読む。言わずもがなを察する。心情を推察する。アンケートに答えてないことに注目する。

アンケートの一箇所しか答えてないことに注目する。こんな感じだろうか。

まだまだ手探りであることを、私は認めなければならぬ。

しかし、ICTで盗ることのできないプライバシーの確立というものはチャレンジャブルではないだろうか。

(「すべて“情報”で表現されている。」というよう少なしの矛盾で終始しないでいただきたい。

すみません蛇足です。)

Living Library

「図書館」から「図書スペース」へ

Library

静岡県民のみならず世界の人々の「なぜ?」「どうして?」に答えるに足りる書籍量とDX化した図書スペースで確実な知識とイメージを膨らませ、世界に羽ばたく準備をする。

課題解決 支援サービス

- ・ 専門的で高度なレファレンス提供
 図書館司書配置
- ・ 開架可能な書籍数日本No.1
- ・ 充実した電子図書
- ・ 教育
 研究支援員

Living

出会いの場

本物
研究開発
世界中の人々
ニューノーマル

創造の場

新たな文化
商品開発
研究開発者
持続可能な技術

交流の場

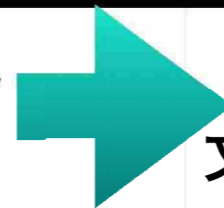
慧眼
専門知識・経験
ディスカッション
ニューテクノロジー

全ての力を集結させた
自由に自己実現可能な
発信の場

多目的エリア

- ・ 個別
 グループ閲覧席
- ・ 常設・企画展
- ・ 製作スペース
- ・ 公共サービス
- ・ リモート会議
 スペース

これまでの本の貸し出しだけの図書館から脱却し「図書館サービス」を静岡県民への投資とする。



ニューノーマル社会で県民全員の
文化・表現の自由、自己実現を可能にする。

タイトル「カプセル閲覧チェア」

説明

●ウイズコロナ

飛沫感染を防ぎ安心して本が読める。
蜜を防ぎ 多人数利用できる。

●アフターコロナ

親子友人で対面して楽しく読書できる

シートの色はグリーンにして静岡茶をイメージする。

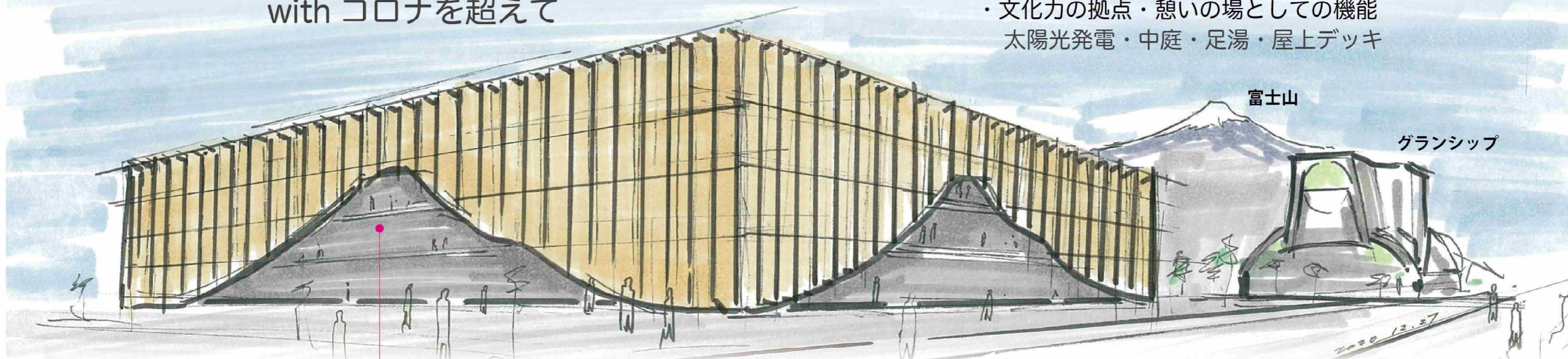


静岡県 新県立中央図書館

ヒノキ香る図書館

with コロナを越えて

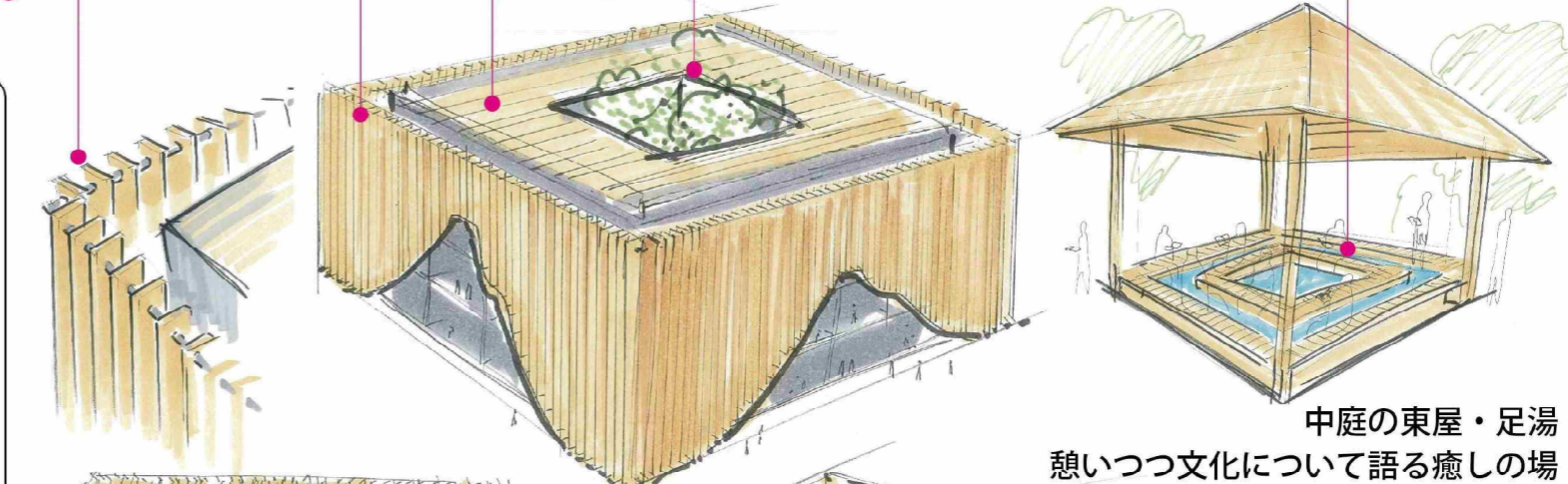
- ・静岡県産の木材・技術を活用
液体ガラスにて難燃化・無変色化・ヒノキも香る家具
- ・人と人とをつなぐ図書館
世界中と交流・富士山静岡空港経由で集う
- ・文化力の拠点・憩いの場としての機能
太陽光発電・中庭・足湯・屋上デッキ



ガラス張りの外壁をヒノキで覆う
県産ヒノキ材を縦ルーバーとして
東静岡から望む富士のシルエットを造形する

屋上デッキ
県産ヒノキ
富士を望む

中庭・温室・太陽光発電・足湯（温泉）
お茶、ミカン、桜、世界の木
スピーカーズコーナー



四方に富士山のシルエット

中庭の東屋・足湯
憩いつつ文化について語る癒しの場

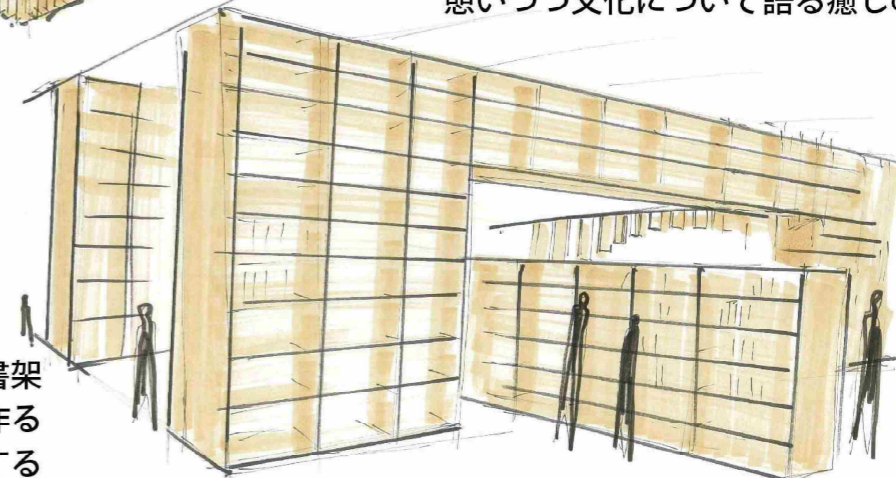
ヒノキ香る図書館・静岡県産の木材・技術を活用

静岡県産の木材:セーヌ河の畔にフランス国立図書館がある。『ドシェ材（カメルーン産）／イッペ材（ブラジル産）』を広い両面の階段・デッキ等に約 4000 m²を使っている。『ドシェ』は、300~400 年前からオランダの風車に使用され、未だに腐らないのです。液体ガラス：静岡県材ヒノキ・杉材も液体ガラスを含浸・塗装すれば珪素・珪砂に包まれるため『燃えにくい・腐りにくい・白蟻に食われない・変色しない・反らない・ささくれない・着色可能・滑り止め効果』があります。木の呼吸を止めないので“香り”もします。木材の劣化を心配する必要はありません。もちろん液体ガラスは、人畜無害です。新中央図書館は、海を渡った材料でなく〈地元の材料・地元の技術〉で建築出来るのです。**太陽光発電:**中庭を作り、東屋を建て、太陽光発電で湯を沸かし足湯に供給。寛ぎながら世界中の人と語らいます。周りには、お茶・みかん・桜などの地元の木を植えます。温室とし常に 25° 以上に保てば、マホガニー・チーク・ラワン・ジャカラダ等の熱帯雨林の木など世界の木も育ちます。（その技術は、下田の東京大学演習林にあります。）

参考：フランス国立図書館の木製巨大階段・デッキ



静岡県産木材を使用した書架
地元家具メーカー・家具職人で作る
ヒノキ香る家具で壁面を構成をする



みんなと繋がる図書館

Web会議システムを利用した事業

高度の情報化社会が進む中で、その利点を最大限生かしつつ、本来図書館が持っている人と人との心のふれ合いを大切に考え、少しでも気持の交流をプラスして行く図書館となるよう「Web会議システム」を利用した事業を提案します。

現在は

現代社会の高度な情報化は、私たちが予測する以上の速さで進み、様々な分野・方法によって拡大しつつあります。

図書館についても、紙の図書カードによる処理の時代から、今ではコンピュータ処理により、蔵書管理から検索・貸出処理等すべて即座に可能となり、図書館利用者の満足度が向上していることはまちがいありません。

課題は

私たちが本との出会いを喜びに感じるのは、カウンターで職員から探していた本を受け取ったとき、あるいは自分が読んだ本について人と話し感動を共有したときなどが思い浮かびます。それは効率化とはまた別のことで、どこか人と人が繋がっているという感覚から来ているものと考えます。ただし、新型コロナウイルスの感染がいつ終息するかわからない状況では難しい問題があります。また、県立図書館の使命として広い県内をカバーする必要があります。

提案は

今、インターネットのWeb上で、会議やミーティング等が出来るソフト（Zoom, LiveOn・・・など）が多数普及しつつあります。このシステムを利用した図書館事業を考えます。

- 1 市町立図書館担当者との会議
- 2 講演会・講座の開催
- 3 絵本の読み聞かせ
- 4 手話による広報、書籍案内等
- 5 読書会・ミーティング

- 1 各地の図書館担当者会議 各市町の図書館とパソコンを通して会議を行います。

顔を見ながらの話し合いはより互いの交流が深まり会議は充実します。集合しないことでウイルス感染リスクもなく、遠隔地の参加が容易です。



- 2 講演会・講座の開催 県立図書館が主催者（ホスト）となり、参加希望者は、

事前に申込み、当日は県立図書館からのメールにより参加が可能となります。参加者はパソコンかスマホがあれば、アプリの登録など不用で簡単に講座生です。

- 3 絵本の読み聞かせ

参加方法は上記2と同じです。

様々な事情で自宅にすることが多いこどもや、なかなか読み聞かせの機会にめぐまれないこども等に有効です。

本紹介にもなり得ます。本の読み手は、市民ボランティアが望まれ、この部分では職員の負担軽減になります。

（参加者の声は ON OF が可能です）

- 4 手話による広報、書籍案内等

映像で直接家庭へ届けることができることから、「手話」が様々な場面で役に立つと思います。手話による「読み聞かせ」ができれば聴覚が不自由な子にも助けになるでしょう。

- 5 読書会・ミーティング

読書のあとで互いに感想、意見を交換することで、楽しみは増します。また、テーマを決めてミーティング形式で意見交換をすることで、例えばまだうずもれている地域資料や、情報なども収集出来る手掛かりが掴めることなども可能性が増すのではないのでしょうか。

まとめとして



以上の提案の実施を考えるときは、まだ細かい技術面、取り決め等が必要ですが、今回 県立図書館が県民にとってけっして遠い存在のものではなく、だれでも繋がることのできる、一人ひとりの力となり得るということを念頭に考え提案いたしました。

静岡県立図書館 構想新聞

6つの提言

タイトル「私の街には、遠方に住む孫や外国から来訪した友人を、お連れしたくなる図書館があります!」と胸を張る、誇れる図書館をつくりたい。

① 外観

。富士山を横から観るのではなく、真上、というより宇宙から観るスケールで、飛翔をイメージした飛行機や宇宙船を思わせる近未来的な建築、東静岡駅に降りた時、左へ歩くと船を思わせるグランドがあり、右へ歩くと、飛行機のような 県立図書館がある。

② 内装

。外観とは違い、登呂遺跡や古代遺跡、古墳を想像させるような土の感触を思わせるしつとりとした空間(表参道商業ビル・G・Y・R・E・ジャイルのようなど)。静と動の場所分けが(カッコ)なされた図書館である事。

静の場 → ゆたりとした通路のある書架、一人になれるコーナー型(さなきのりな吊り下げ式椅子)のスペースや個室の仕切りがあるデスクなど、個人を楽しめるで読書ができる事、また自動の貸出、返却機がある事。

動の場 → 図書館に“動”のスペースなんて、と思うかもしれないが、幼稚園等の遠足や、小中・高校生達が課外授業で図書館に気軽に来館し、(冊の本を皆で見て、意見を言い合える場所)がある事。また、本のソムリエや図書館コンシェルジュが常駐している、レファレンスを受け付けてお(やべ)が可能なスペースがある事。

③ 地域の特性をいかした図書館を中心とする東静岡駅前エリア

。東静岡駅前からは、バスで日本平動物園、大学、可成りなプロムナードを通る、行ける県立美術館、ロダ館へ行ける、という土地柄をいかし、「まさか図書館へ寄る、こ... いやいや 帰りに図書館へ寄るかな」と思われるような存在であってほしい。駅から図書館までの道、プロムナードには、小川が流れ、富士山を模した噴水があり、木々の緑や花々に囲まれたベンチでは、軽食が食べられ、カフェスペースもあり、親子連れが安心して利用できるトイレもある。遠足で図書館へ来館した子供達が、お弁当を食べる事が可能な屋根付きの屋外スペースもある。

④ 公立性重視 (公立である事の重要性という意)

。東京の二子玉川の蔦屋家電や名古屋丸善書店本店のように、商業的に本を扱っている所には、集客が、近年、そういう所が流行しているが、図書館本来のあり方を最重要とした図書館であってほしい。本の保存や専門性の高い希少価値の書籍などを集めたり、広い視野で選書し“公立性ここにあり”と表明してほしい。

⑤ 図書館へ来る人は来る。来ない人は一度も来た事がない人、来ない人をどう誘い込む。

例1. お天気が良いから散歩気分、電車に乗って新聞の北へ読み(市立図書館はほり新聞が県立はほり)に図書館へ行くと、昼食(ランチ)食べて来よう。

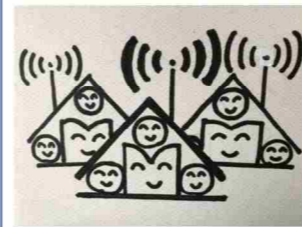
例2. 「お出かけができた」そうだと、図書館へ行こう。問題解決の第一歩となる図書館。

⑥ 「知」の流失は避けたらいい

。専門職である司書は、経験を重ねるとともに、本の知識や技術(新刊の装備や相互貸借や弁償本の処理)の司書一般業務)が豊かになるので、それを流失させないよう長く勤務できる道を確立してほしい。

編集後記

本来、読書とは、最もプライベートな個人的物事であると思う。コロナと共生していく2021年以後は、ソーシャルダンスを守りつつ、こんな時代だからこそ、人と人とが本の内容を語り合ひ、分かち合ひ、共感しあえる場所が必要なのではないか、と強く思い、この構想を提案するに至った。



県立図書館による地域文化の振興と向上 ～県民が楽しく笑顔で暮らす街～

ウィズコロナ、アフターコロナ時代の新しい県立図書館

概要

ウィズコロナ、アフターコロナ時代の新しい県立図書館の使命は、誰でも、どこからでも、必要な時に、必要な情報にアクセスできる「環境」を整備・提供することである。

県立図書館が生まれ変わるこのタイミングで、県民に必要な情報を届けることが第一義であるとともに、他の県立図書館に先駆けて、静岡県がいち早く行政サービス全体の情報のデジタル化促進・活用に着手する(右図：新県立図書館)。建築のLCC (life cycle cost)の一部を、情報のデジタル化に投入する(右下図：経費の冰山[従来型から統合型])。アクセスの良い駅前に図書館を建築することは、一部の県民には有用であるが、全ての県民に対して公平にサービスを提供することを考えれば、デジタル情報の発信に切り替えることは必然である。結果的に、県外から海外まで情報が行き届く。

これからの県立図書館は、建築的な場としての図書館よりも、情報発信こそが図書館の役割とフォーカスする。県内の情報の格差を解消するためには、インフラ整備は必須で、ここには自治体との強力な連携が重要である。メタデータ、情報発信システム、地域資料のデジタル化という新たな事業には、県民を主体的な事業主体として巻き込むことで、県民は郷土への理解が深まるとともに、郷土愛と地域の活性化にもつながる。

新県立図書館では、全県の人、予算、施設などを再配分し、図書館機能に関連する仕組み(structure)と経費(cost)と資源(resources)を統合(integration)する。

- ・ 仕組 = 従来型 * D X (digital transformation) 型 * 研究・調査機能
- ・ 経費 = L C C * 効率化・高度化
- ・ 資源 = 人材とその育成・活用 * 地域資料の電子化 * 地域の知恵の統合

新図書館によって、図書館の機能を効率化し、使命を高度化し、県民の生活様式を刷新し、県立図書館の存在価値を高める。

成果

- ・ 静岡の歴史、地理、人物、社会、経済、風土、産業、芸術、文学の全方位を網羅した情報発信拠点となる。
- ・ 県民と市町村図書館の知恵を集約し、地域の魅力や、住民と自治体の力を再発見し、地域の価値向上と活性化になる。
- ・ 県民は健康・未病などに関わる課題設定・解決ができ、長期的な自治体の歳費縮小と住民サービスの向上につながる。
- ・ 情報リテラシー教育・支援が県立図書館の対象領域となり、ICT活用と情報評価が向上し、県内の情報デバイドも解消する。

住民が考える図書館

『図書館評論』(2019 no.60)

未来の図書館

- ・ 図書館機能の周知
- ・ 基本機能(資料・施設・人)の整備
- ・ デジタル化に対応
- ・ 住民の立場での運営改善
- ・ 住民、地域、行政との共生

図書館のキャッチコピー

- ・ 集中パワースポット
- ・ 文化レベルの向上
- ・ 図書館は世界に広がる窓--楽しく豊かに
- ・ 生活の中の一部としての図書館
- ・ 現実と仮想のブラウジング：本との出会い
- ・ 知育と生涯学習の「場」
- ・ 情報テーマパーク
- ・ ネットと図書館が握手
- ・ コミュニティ型図書館

図書館への期待

- ・ Web サイト上のコンテンツ充実
- ・ ICT 環境の充実、クラウドを活用
- ・ DB、電子書籍充実・貸出・閲覧
- ・ 検索性能の向上
- ・ Wi-Fi 環境
- ・ 閲覧席の予約システム
- ・ 貸出履歴の活用・出力
- ・ レファレンスサービスの更なる充実
- ・ 全国共通アプリ



図：新県立図書館



図：経費の冰山[従来型から統合型]

*「図書館は成長する有機体である。」ランガナタン



新しい図書館は人が自然と集まる地域の新しい居場所となることが期待されています。
 そんな魅力的な場所で、日常の延長で気軽に本と出会う「きっかけ」をつくりたいと思い
 屋外に設置する「地中に埋まる本の貸出 BOX」を提案します。

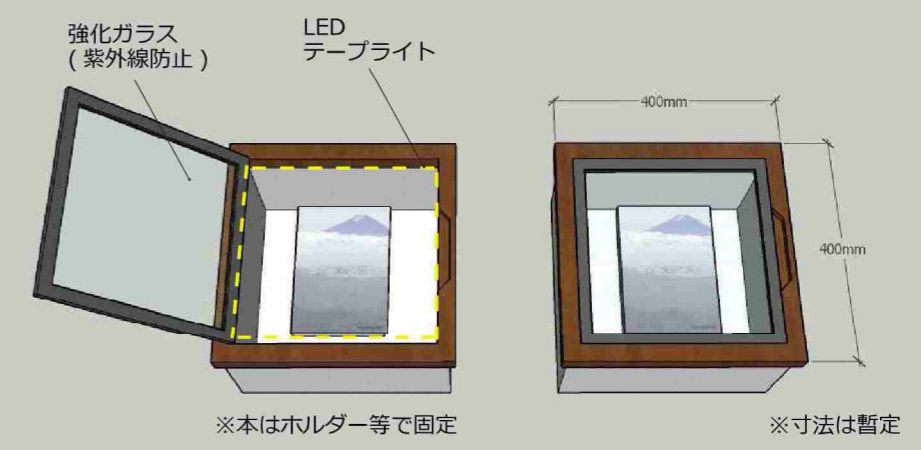
貸出 BOX のデザイン

図書館の敷地の地中に埋まるデザインとすることで「曲金北遺跡」を連想させ
 本が地中に埋まる財産のような貴重な存在であってほしいという願いを込めました。

貸出 BOX の運用

- ・貸出 BOX 1 つにつき 1 冊のみ貸出
- ・借りるときはマイナンバーカードを使い、IC で自動貸し出しを想定
- ・本はその日に関係する本や話題になっている作家の本、今読んでもらいたい本など
- ・24H 使用可能を想定し、幅広い人に多くの出会いを提供
- ・本の返却は図書館の返却 BOX を想定

貸出 BOX の詳細



1 人との出会いが人生を変えるように
 1 冊との出会いが人生を変えてくれることを願って。

一期一会



図書館の近隣の公園に子供と遊びに来るついでに
 本を借りて読むことができ、忙しい子育て世代にも
 気軽に本と出会う「きっかけ」ができます。



図書館が閉館している時間でも、帰宅時に気軽に立ち寄ることができ
 時間を問わず本と出会う「きっかけ」をつくります。



貸出 BOX は本を貸し出すだけでなく、夜の図書館を明るく演出し
 地域の新しい景観となることを期待します。

【調べ物を助ける閲覧台】

《初めに》

このアイデアは大学時代、本に目を通してレポートを書いていると引用したい場所が分からなくなったり、読んでいた時に考えていたことがメモに残っていなかったりすることが多々あり困った経験をもとに考えた。もう一つは、神奈川県立図書館・神奈川県立川崎図書館 twitter(@kanagawa_lib)のツイート¹の中で、図書館の本に付箋をつけてはいけないと知ったからだ。そして、新しい静岡県立図書館は大学などの教育機関も近く学术書も多いこと、東静岡駅が近く交通の便も良くなることから利用が増えることから、調べることの特化した機能がある机やブースを考えた。

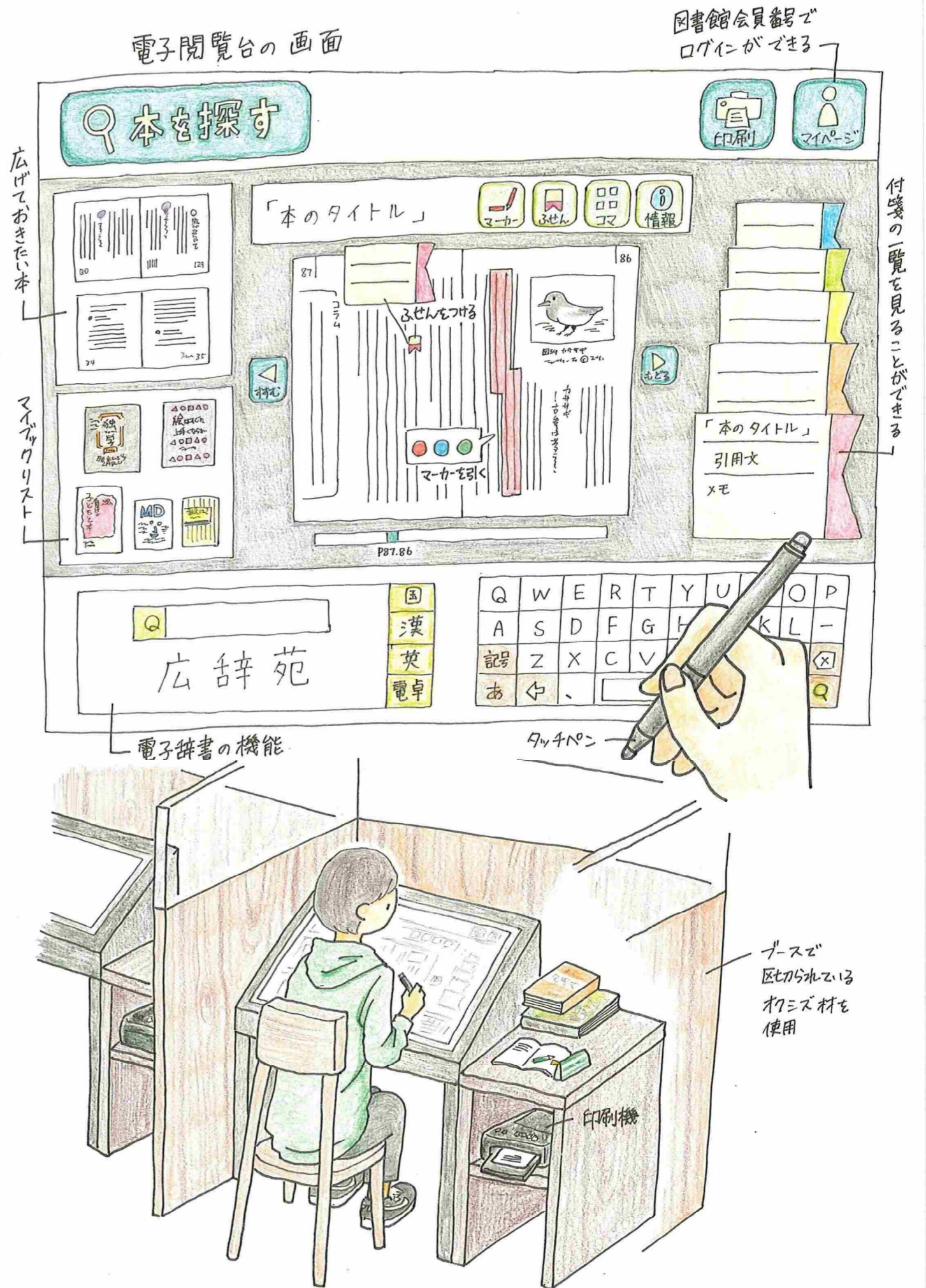
そして、調べるという行為で紙の本を閲覧する必要性も残っていくと思う。なぜなら、紙の本をべらべらめくるという行為が、探していた知識やそれ以上の知識を手に入る機会を提供してくれるからだ。また、たくさんの本に短時間で目を通すことができるのは紙の本ならではの強みだと思う。紙の本も利用しつつ、電子書籍に付箋メモや線を引けるようにすれば、メモとして自身の考えを残したり、引用ができるように書誌情報を管理しやすくなると思う。また、整理した電子データを自身の図書館会員番号と紐づけできるようになれば、自分だけの電子スクラップブックや研究ノートを作る事ができる。また、いくつもの書籍を広げておけるような電子閲覧台というのは、ちょっとした自身の夢でもある。

《概要》

電子パネルの閲覧台。他の図書館との横断検索にも使える。検索タッチパネルによる電子書籍への書き込みや、電子付箋によって自由に引用とコメントがつけられる。このまま印刷データとしても印刷できたり、電子データとして保存しておくことができる。また、レファレンス時に指定された席のパネルに書誌データと電子書籍が表示される機能もある。

《参考》

¹ 神奈川県立図書館・神奈川県立川崎図書館 twitter(@kanagawa_lib) 2020年12月31日閲覧 https://twitter.com/kanagawa_lib/status/1009634564661112832?s=20



TOKAIDO HUB SPOT

書物

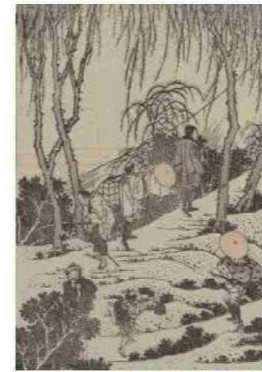
商人

茶屋

知のインプットからアウトプットまで。
100年に及ぶ収集がもたらす85万冊超の図書館資料。
日々人と情報が融合して生まれる新しい居場所。
それが図書館機能の新しいカタチです。

<プロジェクトの意義、ネーミングに関して>

古くから人、物、情報が東西に行き交う東海道。そのおよそ中間地点に位置するこの場所が、静岡県の経済・社会を未来につなげる「HUB」になります。文化的、経済的社会的な礎とも言える「知」を支える図書館が新たな役割を果たすときがきました。



書物 図書館資料と多様な情報資源の提供

ウィズコロナに呼応し、ニーズの高まるデジタルリソースの提供。
図書館は積極的に取り込み、成長を続けます。
資料のデジタル化、ポーンデジタルへの対応
この街の「今昔」を未来に伝える地域特有の情報資源の収集。
得意とする「紙」の資料にとどまらず、
散逸しやすいデジタルリソースについてアーカイブする仕組みを構築。
多様なかたちの情報を提供し「知」のインプットを支援します。



商人 コワーキングスペースの運営

従来インプットを目的として人が集ってきた図書館が
アウトプットまで一貫通貫して支援することで、
アフターコロナも見据えた「地域で学び、働き、暮らす」ための取り組み。
Society 5.0の実現に先駆けてAI・IoTを最大限に利活用。
世代を超えた学びと調べの場、各種ビジネス支援、
コミュニティ創出を支援するマッチングの場としても機能させ、
関わる人々の暮らしと経済の活性化を図ります。



茶屋 イベント開催でコミュニケーション活性化

歴史、食、ものづくり、音楽...
静岡のカルチャー発信、わたしたちのコミュニケーションの場。
県民主体の暮らしとまちづくりに向けてこの場所から歩みを進めます。
普段はコワーキング利用者に向けた軽飲食提供も。
全国有数のお茶の名産地、静岡県のメリットを活かした茶屋が
地域ににぎわいをもたらす「HUB」になります。

葛飾北斎/画「富嶽百景」静岡県立中央図書館蔵

